

ニューズレター第一〇号

ドイツ現代史研究会ニューズレター第10号（2009年9月）

内容

- ・ リューネブルク滞在記（2008年～2009年）（佐藤温子）
- ・ 2009年度6月例会報告（田中晶子）
- ・ 会員の近著から（2008年2月～2009年7月）

リューネブルク滞在記（2008年～2009年） 佐藤温子（大阪大学大学院、リューネブルク大学留学中）

筆者は、リューネブルク大学民主主義研究センターのDoktorandinである。同センターでは、東欧諸国の民主化や各国の民主主義分析等が主な研究テーマである。その中で、筆者の指導教員 Thomas Saretzki 教授は環境政策を専門としており、環境保護と民主主義の関係にも造詣が深い。

筆者はリューネブルクにおいて政治学や環境政策に関するゼミナールに参加する一方で、Gorleben Archiv や Gottfried Wilhelm Leibniz Bibliothek、また反原発運動の集会に参加して博士論文のための資料収集を行っている。本稿では、第一に留学準備や大学での授業の様子、第二に Gorleben Archiv や Gottfried Wilhelm Leibniz Bibliothek、反原発運動の集会の様子について述べていくこととする。

リューネブルク大学への留学準備

留学に際して、振り返れば非常に他の人達に助けてもらったし、それは現在も進行形である。若干恥ずかしいが、これから留学を志す方々には役に立つかもしれないと思い、率直に以下に書いてみることにした。全て書ききれないほど有形無形でお世話になっている方々に、改めて感謝したい。

では、留学準備から以下に順に記していくこととする。当初筆者が留学先を決める際には、特別なつてもなかったため、尊敬する先輩研究者に相談した結果、自分の研究対象と

関連のある教授にメールを送るという方法をとった。その際には、教授側で他大学への招聘や定年等の諸都合も考えられるため、自身のテーマと留学期間を提示して受け入れの可能性について尋ねる、というアプローチの仕方をした。結果、受け入れの際に研究計画書を出すように言う教授が居る一方で、最初に筆者を世話してくれることになった現大学の Ferdinand Müller-Rommel 教授は、テーマを提示した最初のメールだけで即座に無条件で歓迎の意を表してくれた。筆者は研究計画書も提示していない状態で受け入れ可とされたことに驚き、またこのときにはまだ他大学との間で迷っていたが、日本の指導教員である木戸衛一准教授（大阪大学）も含め、尊敬する研究者諸氏に相談したところ、「研究対象と資料に近い」、「(当時迷っていた大学のあるベルリンより現大学のある) 地方都市のほうがマイペースに研究ができて佐藤さんのペースに合っている」、「研究テーマだけで分かることもある」等のご意見をいただき、結局現大学に留学することにした。結果的に、この大学に来て良かったと思っている。筆者の研究テーマはゴアレーベンにおける放射性廃棄物処分場問題をめぐる政治過程だが、その対象である地域のゴアレーベンは同じニーダーザクセン州にあり、アクセスも比較的容易である上に、リューネブルク自体もまた、反原発勢力にとって重要な拠点だからである。すなわち、特に研究対象や資料への近さが挙げられる。2008年11月に、ゴアレーベンにおいて約1万6千人が参加するという史上最大規模のデモが起きたが、その際には当大学にも反原発運動家が来て講義講堂でデモの説明と勧誘を行った。また、リューネブルク駅前の広場でも抗議集会が行われ、筆者もその中に入って集会の様子を観察することが出来た。さらに必要なときにはすぐに Gorleben Archiv や Gottfried Wilhelm Leibniz Bibliothek に行けることや、その上地元運動家や政治家にコンタクトできることなども非常に良い点である。

さて、リューネブルク大学について少しばかり紹介してみよう。同大学は、北ドイツの非常に小さな街にあるが、革新的で野心的な一面を持つ大学でもある。たとえば現在の学長がドイツで1番若くして就任(当時36歳)したことや、Diplom, Magister から Bachelor, Master へと移行する教育改革が進められていて、2008年にメルケル首相が視察のために大学を訪問したことなどが挙げられるだろう。地元紙によれば、メルケル首相は、当大学を「kleine Exzellenzuniversität」と評したそうである。

当大学では、DSH無しで最大2ゼメスター留学可能である。そのため筆者は当初もDSHを受けておらず、博士課程に在籍している今も幸運なことに受けていない。通常の学生は入学に際してDSHに合格する必要があるが、博士課程の学生のDSH有無に関しては、受け入れ先の教授の意向次第である。また研究開始時期も通常の学生なら10月のところを、博士課程ということで4月から開始させていただいた。博士課程進学の際には、日本の大学の成績証明書(英語・原本)、教授の受け入れ許可を証明する書類、研究計画書(ドイツ語)

を提出した。博士課程進学前にいくつか授業は聴講していたが、自分の研究に専心したかったので、結局単位は修得していなかった。なお、この間により専門に近い Thomas Saretzki 教授が他大学での招聘を終えて当大学に戻ってきた。ちなみに、研究計画を作成する際には教授と相談し調整する必要もあり（筆者の場合は実際に計画を若干変更した）、さらに試験期間や Urlaub 等といった教授側の都合もあるため、書類自体は余裕を持って書いておいた方が良いと思う。

大学での授業の様子

次に、大学の授業について書いてみよう。筆者は Doktorandin として基本的に単位の取得義務は無く、博士論文をマイペースに書ける環境である。ドクトラント・コロキウムは毎週行われ、使用言語は主にドイツ語だが、そのうち英語の回が三分の一から半分といったところである。コロキウムでは博士論文の報告に加えて、ドイツ国内に止まらずイギリスやイタリアからの研究者等が時折来て報告する形となっている。

また、大学の普通の授業 Vorlesung、Seminar でもドイツ語と英語それぞれの授業が行われている。たとえば筆者の指導教員はハンブルク生まれのドイツ人だが、ドイツ語と英語による授業の両方を行っている。英語の授業（今期は Climate Change and Democracy）では、議論も資料も使用言語は英語である。

とかく言われることであるが、ドイツ人の発言の多さ、議論への積極的な参加には目を見張るものがある。授業中に同じ学生が何度も積極的に発言し、議論を進めていくのも珍しくない。

学生が Referat を行うだけでなく、司会進行や Referat への批判を担当する授業もあった。批判する学生が、なかなか厳しいことを述べているのを少なからず聞いたことがある。また、学期最後の授業には、総括としての議論と Seminar への批判 (Conclusion and Critique of Course) の回が設けられている。

筆者も Referat を行う機会があったが、その際に日本の大学と違う点として挙げられるのは、紙のレジюмеは基本的に作らないでパワーポイントを主に使うこと、報告者は紙に書かれた文章を基本的には読まないことが望ましいこと、聴衆に関心を持たせるようにより努力しなければならないことである。

もしどうしてもメモが必要な人は、A 5 位の大きさまでなら許される。その場合も、なるべく紙の文章を見ないように話さなければならない。聴衆に関心を持たせるというのは難しい点であるが、少なくとも話しながら聴衆に目を配り反応を見ながら進めていく必要がある。

資料収集について——Gorleben Archiv、Gottfried Wilhelm Leibniz Bibliothek、反原発運動

Gorleben Archiv はリューネブルク駅前からのバスで行くことができる。ここは現地の反原発運動家たちがゴアレーベンに関連した資料を集めた場所である。ただし資料編纂中である。しかし、関連する学位論文なども集められており、研究状況を把握するには非常に良い場所といえる。さらに、運動家が運営しているため、直接インタビューしたり、不明な点等を尋ねることが可能である。

Gottfried Wilhelm Leibniz Bibliothek はハノーファーの中央駅から地下鉄で10分位で行ける。ここでは、特にニーダーザクセン州のローカルな新聞にアクセスすることができる。新聞にはマイクロフィルムと冊子状態のものがある。マイクロフィルムは申込後30分から1時間で利用可能であるが、冊子にまとめられているもの場合は書架からの移動に1日掛かる場合があるので、前日までの予約が必要である。また、例えば Braunschweiger Zeitungなどは同名の新聞が複数あるので、注意した方がよい。

最後に、反原発運動の集会はゴアレーベンにおける放射性廃棄物の輸送が行われる時期以外は、特定の場所でというよりは不特定の場所で散発的に行われることが多い。反原発運動のHPを見ると掲載されているが、ブラウンシュヴァイクやハノーファー、ゴアレーベン、ベルリンなど様々である。筆者は何度か参加したが、その中でアジア人は筆者のみであった。それでも、周囲の運動家は暖かく迎えてくれた。さらに、リューネブルク大学で環境学を学んでいる学生が反原発運動に参加しているだけではなく、筆者とゼミが一緒だったりして話しかけてくれることがあった。ドイツ人の中に筆者のようなアジア人が居ると目立つらしく、静かにしていても反原発運動家の人々の方から声をかけてくれたり、地域の「緑の党」(Bündnis 90/Die Grünen) 党員の方が協力が必要なら連絡をくれと名刺をくれることもあった。なお、リューネブルク大学では、学生はニーダーザクセン州内と近郊の諸都市(ハンプルク、リューベック、ブレーメン等)までの普通列車とリューネブルク市内のバスが無料である。

留学前、尊敬する研究者の方が、「現地に行けば、これを書けば良いということよりも、これを書いては嘘になるということが分かる」とおっしゃっていた。結果的に、現地に来ることにより資料は勿論、研究テーマの奥深さや他の側面を発見することができたと思う。こうして現地で研究を行えるのも、筆者を支えてくれる皆さんのおかげである。筆者をいつも励まし応援してくれる家族、留学前も後も厳しくも暖かい指導をしてくれる指導教員の木戸衛一准教授、すべて名前は挙げられないが筆者が迷ったときには貴重な時間と労力を割いて相談にのってくれ、良い刺激を与えてくれる友人や知人、すべてに感謝するとともに、今後改めて気を引き締め、しっかり研究成果を出す所存である。

(※最後に、本論における情報はあくまで 2009 年 7 月現在のリュネブルク大学における状況であることをお断りしておく。)

2009 年度 6 月例会報告
(合評会：川越修・辻英史編『社会国家を生きる』)
田中晶子 (大阪大学大学院)

今回のニューズレターでは、2009 年 6 月 27 日に開催されたドイツ現代史研究会 6 月例会の報告をさせていただきたいと思います。6 月例会は、川越修・辻英史編『社会国家を生きる』(法政大学出版局 2008 年)の合評会形式でおこなわれ、総勢 20 名の出席者を数える盛会となりました。

『社会国家を生きる』は、第二帝政期からの西ドイツの 1970 年代までの長期のタイムスパンのなかで、ドイツ型社会国家の歴史的展開を再考しようとする試みです。現代の社会福祉国家の形成された過程を、それぞれの社会の歴史的展開＝「経路依存性」に着目して再考しようという同書は、日本型社会福祉国家がゆらぎ、社会的包摂の構想力が問われる現在、同世代の社会的関心にこたえる問題を扱った一冊だと思われます。

合評会の前半は、辻英史氏(東京大学)による報告、高橋英寿氏(立命館大学)、高岡裕之氏(関西学院大学)による問題提起とコメントを中心に進行し、後半部分は、川越修氏(同志社大学)をはじめとする執筆者〔石井香江(四天王寺大学)、北村陽子氏(名城大学)、中野智世氏(京都産業大学)、原葉子氏(お茶の水女子大学)、馬場わかな氏(東京外国語大学・院)〕と出席者の間で活発な質疑応答がおこなわれました。

はじめに、編者のひとりである辻英史氏による報告『社会国家を生きる』ができるまで』があり、同書が誕生するまでの経緯についてご紹介がありました。出発点となる 2005 年の初夏以来のワークショップの活動内容を中心に、論集として完成するまでの具体的な経緯とともに、日独をはじめとする比較史研究に開かれた社会国家の社会史という同書の基本的な問題設定について、詳しい解説がありました。また、『社会国家を生きる』以降の研究活動についてもお話があり、2009 年 4 月に第 2 期のワークショップ「戦後西ドイツにおける『社会国家性』の歴史的展開―家族をめぐる『包摂』と『排除』」が開始され、西ドイツの社会国家の展開を家族・関与者・当事者・改革運動の 4 つの行動主体の相互関連として捉えようとするプロジェクトが現在進行中との興味深いご紹介がありました。

辻氏の報告後、コメンテーターの高橋秀寿氏(立命館大学)から、現代の社会国家を分析する際の基本的な視角にかかわる大局的な問題提起とコメントがありました。

高橋氏は、これまでの社会国家論を、1) 解放のサクセス・ストーリーとしての肯定的な社会国家論、2) 国家干渉を問題とし、生=政治権力論と親和的なネガティブな解釈、3) 1970年代以降の社会国家の転換を踏まえたオールタナティブなアプローチの3つに分類したうえで、『社会国家を生きる』のなかには3つの見解が混在している点を指摘され、とりわけ、1970年代以降の社会国家の転換をどう位置づけるかが、現代の社会福祉国家のあり方を考える際に重要であるとの見解を示されました。この点は、1970年代以降のドイツにおける社会国家の転換の位置づけは論集が前提とする時代区分の問題と密接にかかわるだけに、後半の質疑応答の時間でも、多くの質問とコメントが集まりました。

この論点は、高橋氏が第2の論点として挙げられた「誰が/何が『社会国家』を展開・転換させているのか？」という権力論が希薄であるという指摘とも関係があり、ドイツの社会国家が1950/60年代の「黄金期」から1970年代以降の「変動期」にかけて転換した際の「移行の論理」を問うものだといえます。質疑応答では、U・ベックの再帰的近代化論が提起する「個人化テーゼ」が、社会政策・社会国家の領域でどこまで妥当するかについて、数名から質問やコメントがありました。合評会では結論には至りませんでした。70年代以降の社会国家の歴史的評価については、今後の社会国家研究の重要な課題であるという印象を受けました。

次に、2人目のコメンテーターである日本近現代史を専門とされる高岡裕之氏（関西学院大学）から、1) 日本史研究における社会国家論の研究潮流の整理とともに、2) 個別論文の研究対象について、同時代の日本の社会国家と比較を踏まえた詳細なコメントがありました。

1) の社会国家の研究史に関しては、これまで日本史の市民層研究では、国民統合論・支配論の観点から下層民に研究対象が集中してきた反面、中産階級を対象とした社会国家の実態・制度に関する研究が欠如してきた旨のご指摘があり、1970年代以降、厚い研究の蓄積があるドイツの市民層研究との違いについて、あらためて意識させられました。また、日本近現代史における社会国家論の位置づけに関して、とりわけ総力体制論や国民国家論の枠組みのなかでは、20世紀の社会国家に対する否定的なアプローチが主流を占めるのに対して、『社会国家を生きる』をはじめとする川越氏の世界社会国家研究では、社会国家の展開を主体として動かしてきた社会改良主義に正当な位置づけがなされている点が特徴であると述べられました。

2) の同時代の日本の社会国家との比較についてのコメントでは、近代日本における社会国家の展開をドイツと比較した場合、とりわけ第1次世界大戦までの時期において、福祉・公衆衛生の領域での社会資本の整備に市民層が果たした役割に大きな差が見られる点、長らく健康保険を中心として運営されてきた日本の社会保障制度に対して、なぜドイツでい

ち早く年金制度の制度化が進んだのかという疑問点、そして、ドイツでは、ソーシャルワークが、市民層の男性名誉職から女性「有給専務職」へと早期に転換されたのに対し、近代日本では「方面委員」「民生委員」という形で、無給の男性名誉職制度が遅くまで残存していた点など、日独の社会国家の展開を考えるうえで示唆に富む指摘が多くあり、たいへん興味深く伺いました。

高岡氏からは、日独の社会国家の展開の違いについて、都市化・工業化・人口動態の変化といった「近代化」の両国の時間的な差異にもとづくのか、あるいは、社会国家の基盤となる社会的連帯のあり方の違いまでを含む、より根本的な要因に由来するものなのかという問題提起がありました。日独の社会国家の差異と比較については、多くの参加者から質問とコメントがあり、日本とドイツの「市民層」「市民性」の違いや、比較の意義をめぐって質疑応答がかわされ、議論は「近代社会を『社会』たらしめているのは何なのか？」という社会学の古典的な問いに及ぶ射程の長いものとなりました。比較研究に開かれた社会国家論という『社会国家を生きる』の問題意識にふさわしい充実した合評会だったと思います。

今年度は会計事務を担当しているため、定期的に例会に出席させていただいています。2009年度は合評会形式の例会がいくつか企画されていますが、何らかのかたちで日独の比較史的な視座をとる研究書にふれる機会が多い印象があります。

6月例会につづき、来月25日に開催される10月例会では、望田幸男著『二つの戦後・二つの近代——日本とドイツ』（ミネルヴァ書房、2009年3月）の合評会が予定されています。西ドイツ建国から60年、ベルリンの壁の崩壊から20年。戦後ドイツ史の記念年が重なる今年、私自身にとっても、あらためて日本とドイツの戦後について考える一年となりそうです。

会員の近著から（2008年2月～2009年7月）

- ・ 田野大輔「子供にそのことを話しましょう！——第三帝国における性的啓蒙の展開をめぐって」『ゲシヒテ』第1号（2008年3月）
- ・ 田野大輔「性生活の効用——精神療法とナチズムの関係をめぐって」『思想』第1013号（2008年9月）
- ・ 田野大輔「余暇の枢軸——世界厚生会議と日独文化交流」『ゲシヒテ』第2号（2009年3月）
- ・ 田野大輔「愛と欲望のナチズム——『健全な性生活』の畏」『ドイツ研究』第43号（2009

年 3 月)

- ・中野智世「乳児死亡というリスク——第一次世界大戦前ドイツの乳児保護事業」川越修・友部謙一編『生命というリスク——20 世紀社会の再生産戦略』法政大学出版局（2008 年 5 月）、61-99 頁
- ・中野智世「家族の強化とソーシャルワーク——マリー・バウムの家族保護構想から」川越修・辻英史編『社会国家を生きる——20 世紀ドイツにおける国家・共同性・個人』、法政大学出版局（2008 年 12 月）、207-239 頁
- ・Tomoyo Nakano, *Familienfuersorge in der Weimarer Republik. Das Beispiel Duesseldorf*, Droste Verlag, 2008.
- ・中野智世「『母性と騎士道精神と』——1920 年代の社会福祉にみるジェンダー構造」姫岡とし子・川越修編『ドイツ近現代ジェンダー史入門』青木書店（2009 年 2 月）、254-262 頁
- ・野田昌吾「ドイツ・キリスト教民主同盟 (CDU)」田口晃・土倉莞爾編著『キリスト教民主主義と西ヨーロッパ政治』（木鐸社、2008 年）
- ・野田昌吾「ドイツ」網谷龍介・伊藤武・成廣孝編『ヨーロッパのデモクラシー』（ナカニシヤ出版、2009 年）
- ・肥前榮一『比較史のなかのドイツ農村社会——『ドイツとロシア』再考』（未来社、2008 年）
- ・ユストゥス・メーザー、肥前榮一他訳『郷土愛の夢』（京都大学学術出版会、2009 年）
- ・姫岡とし子『ジェンダー』（共著）（ミネルヴァ書房、2008 年 7 月）
- ・姫岡とし子『ヨーロッパの家族史』（山川出版社・世界史リブレット、2008 年 10 月）
- ・姫岡とし子・川越修（編）『ドイツ近現代ジェンダー史入門』（青木書店、2009 年 2 月）
- ・藤本建夫『ドイツ自由主義経済学の生誕——レプケと第三の道』（ミネルヴァ書房、2008 年）
- ・藤本建夫「競争的市場経済と補完性原理」『甲南経済学論集』49-1（2008 年 6 月）
- ・藤本建夫「競争的市場経済と補完性原理」『道德哲学の現在——社会と倫理』甲南大学総合研究所叢書 100（2009 年 3 月）
- ・藤本建夫「グローバル化する経済と世界大不況」『季刊 ひょうご経済』No. 102（2009 年 4 月）
- ・牟田和男「書評『ヒムラーの魔女カードボックス——国家社会主義の魔女迫害への関心』」『新しい歴史学のために』270 号（2008 年 4 月）、23-28 頁
- ・村上宏昭「ヴァイマル共和国における「大戦の語り」と世代間抗争——「前線世代」の戦争文学」『ゲシヒテ』第 1 号（2008 年 3 月）

- ・村上宏昭「ドイツ世代論の展開と歴史研究」『西洋史学』第232号（2009年3月）
- ・村上宏昭「教養人、この非政治的なるもの——ドイツ教養理念と第一次世界大戦」『ゲンヒテ』第2号（2009年3月）
- ・望田幸男『二つの戦後・二つの近代——日本とドイツ』（ミネルヴァ書房、2009年3月）